

〔最古参の社長との対談〕

佐藤 こんにちは佐藤文昭です。それでは今からですね、音声プレゼントの二つ目としまして、私と、私のグループ企業の最古参にあたる社長との特別対談音声というものを、これから収録していききたいと思うんですけども、本当に最古参、一番昔からですね。もう10年、10何年になるんですけども、一番古くから一緒にやっている社長でして、もうすでに家族みたいな関係性で、ずっと仲良くね、やらせていただいているんですけども。

その社長は今ですね、建設系の解体工事のマッチングのサイトとかも運営してまして、その仲介数とかもね。今では日本一の数になったりしております。その社長と普段から、たくさんお話はしているので。今回は何を話そうかなあっていうふうになっているんですけども、何かテーマを決めて話してしまうと、そこに寄ってしまうかなっていうのもあったので、実は今、何も打ち合わせもせずに、今回はズームでの、録音になってはいるんですけども、お互い国が離れすぎててなかなか、スケジュールがちよっと合わせられず

で、出版の日も決まってしまったので、ちよつとそこまでね。実際に直接会うっていうのは難しくなってしまったので。急遽、ズームで撮影をしようということになりましたので、ちよつとね、音声も聞きにくいところがあるかもしれないんですけども、そこはちよつとご了承いただければと思います。

で、その社長、鈴木っていうんですけども、普段は名前の方の、ゆういちって言うんですけど。そのゆうちゃんっていう感じで、ゆうちゃん自体ですね、周りからそう言われることはないんですけども、私から唯一、ゆうちゃんと言われるみたいな関係性。なんですけれども、本当にね、あの家族みたく付き合ってくれて。で、今でも一緒になって、いろんな夢に向かって歩んでいるっていうね、あの社長ですので、こういう音声になるか、私もちよつと、本当に分かってはいないんですけども、何かね、一つでも大きなきっかけを

つかんでいただけるようなね。音声になったらいいなと思いながら、対談を試してみたいと思いますので、ぜひね、最後まで聞いていただければと思います。

ではゆうちゃん、よろしくお願いします

鈴木 はい、よろしくお願いします。

なぜ、この会社には活気が満ちているのか？

佐藤 はい。ということで、あの本当に何もテーマも、決めてないので、とにかくちょっと今、ふとね、このテーマとか、なんかこういうのがいいかなって思うのを話していくんですけど、普段も、たくさん話してるから、その内容よりはなんだろうな、何かこう聞いてくれる方々が、皆さんがね、何かいい気づきのきっかけみたいなものを得てもらえる内容を話せたらいいなと。気合いを入れて話すと、まさにそれがね、こう欲が出ちゃうから、

それはよくないので、はい、あの上のね、ひらがなの「わたし」とつながっている感覚で、なんか話していければなと思うんだけど。

まあ、一つ言えるのが、まずは今回そのなんだろう。TheGreatLuckの中に書かせていた内容の中で、社員のエネルギーっていう部分を、やっぱり組織というものを束ねながら運営していかなきゃいけない。組織を運営していく中ではね。その中で、いかにその社員、働いていただいてるスタッフの皆さんのエネルギーを増幅させながら、増やしなから、会社を運営できたらね、それがベストなわけです。そうすると会社もどんどんエネルギーになって、光り輝いて大きくなっているわけだけど。ゆうちゃんの会社が今、例えば解体工事っていう部分の仲介業と言え方がいいの？

鈴木　そうですね、はい。

佐藤　だよね。それをネットでやってる。そこで、今、日本一っていう数字を取れて、取れるまでに至ったっていうのは、おそらくやっぱりそこら辺の社員のエネルギーチャージとかね。そこら辺のエネルギーがすごく高まっている状態で、組織をずっと運営できたからだと思うんだよね。

で、今回のTheGreatLuckの中にも書かせていただいた。要は、例えば社員にその美味しい野菜を配るとかね。あれは実は、ゆうちゃんの会社で。ゆうちゃんは読んでてわかったと思うんだけど、あれはゆうちゃんの会社の話を書いているわけで、あそこらへんっていうのはやっぱりそういった、なんだろう。まあ、まずそこを今どういうことをやってるかを、もうちょっと聞かせてもらおうって感じでもいいかな。

波動を上げるための具体的な取り組み

鈴木 はい、わかりました。あのそうですね。今おっしゃっていただいた食べ物とかを用いて波動を上げるっていう部分に關しましては、やっぱり佐藤さんと日頃からお話をさせていただいてた通り、やっぱり僕自身も、もともとそうだったんですけども、僕自身がもともと難病持ちだったので。腎臓の。そのあたりで非常にそれをきっかけになんというか、なんとかしないといけないってことで、佐藤さんにもいろいろ教えていただきなながらも、いろいろ考えたときに、やっぱり、食事を良くしないと体が重い方に引っ張られちゃうなっていうのが、自分自身もそうでしたし、仲間を見ているとよくわかったので。

佐藤 そうだね。

鈴木 そうなんですよね。で、野菜とか、お米とか。あとはそれでは取りきれない栄養面もあると思うんで。サプリメントと、あとプロテインはあるんですよ。

佐藤 いろいろあるんだねそれを希望するスタッフに渡していくみたいな

鈴木 そうですね。あとお水ですね。お水は温泉水、九州の温泉水。飲む温泉水ですね。

佐藤 えっと、それを福利厚生で出してるみたいなの

鈴木 はい。あと卵です。

佐藤 卵！どんどん出てくる。

鈴木 そうなんですよ。

佐藤 やっぱりどんどん増えていく感じ？

鈴木 少しずつ増えて。

佐藤 そりゃそうだね。みんなが元気になるんだったら配っていききたいもんね。で、実際にその配る前と配った後っていうのは、やっぱりちよつとこう目に見えて反応は変わる？

鈴木 ああ、変わります。

佐藤 変わるんだ。

鈴木 変わりますね。僕自身もメンバーから聞きますね。変わったと。実際にあの調子がよく、疲れにくくなりましたとか

佐藤 ああ、なるほどね。

鈴木 あとお昼休みとかも、今までコンビニ弁当を食べていたのが普通だったんですけども、やっぱりそれが玄米とかに変わるんですよ。

佐藤 そうなんだ。

鈴木 玄米と納豆とか

佐藤 玄米、納豆は最高だね。やっぱりコンビニ弁当を毎回ルーティンで食べている人が玄米納豆とかに変えたら、それは体がね、良くなりますよね。よくなっていくよね。それは選んだ玄米とか？

鈴木 もちろんです。千葉の山奥の方です。山奥の。

佐藤 面白いね。それは。あと、それに加えてあれだよね、その週に一回ぐらいだっけ？
そういう、なんていうか。みんなでそういうどうやったら波動が上がるか、エネルギーが高まるか、みたいな、そういう話っていうのをしているんだっけ？

鈴木　そうですね、させていたんでいます。みんなでは今は、そのテーマは波動が上がるということではないんですけども

佐藤　ではないんだ。うんうん。

鈴木　はい、僕の中では一つ、それがテーマとしてあるんですけど。佐藤さんから教えていただいたこととか、あとはそのいろんな気づきとか。いろんなことを踏まえながら。

佐藤　それを共有していくと、それも今回本にも書きちゃってるんだけど、働いている社員、同棲しているパートナーの方の鬱が治ったっていうね。

鈴木 それは本当に、嬉しかったですね。

佐藤 ゆうちゃんの会社の話なんですけど、書いちゃったんです。

鈴木 いや、ありがとうございます。

佐藤 もう治っちゃったのね、

鈴木 そうなんですよね。実際、食べ物とやっぱり、今回のご著書でもある通り、その物の捉え方とか。そういったものを少し変えるだけで、本当に人生が激変するんだなっていうのを、本当に僕も体感できたんで勉強になりました。

資本主義の「その先」へ

佐藤 ああ、なるほどね。今回は、なんて言うんだろうな。世の中の今の資本主義がまだベースとして残っているこの地球上だから、資本主義ベースで行くと、結局その資本を持っている人間がパワーを持つ。それでそういう人間が結局、会社を引っ張っていく世の中になっているから、それがなんて言うんだろうな。当たり前前のベースになっちゃってるっていうか、通常はね、それってどういうことかといったら結局、例えば服を売るのであれば、いかに安く作るか、いかに安い場所で安い賃金で。働いてもらって安い服を作って、いかに低コストで流通させるかとかね。そうすると利益が残るから結局株価が上がる。っていう発想になるし。そういう組織形態から見みると、本当に真逆に見えると思うんだよね。ゆうちゃんはね。おそらく。

それに世の中は今気づき始めているから。やっぱりそういう、ゆうちゃんみたいな会社っていうのは、どんどん増えていくと思うんだよね。でも、どうしてもやっぱりその、目

立つ会社っていうか、目につく会社っていうのは、やっぱりそっちの傾向が強いから。やっぱそこが世の中のスタンダードに見えるよね。

だからそれを見て、今回の本のプロローグのような世の中だね。結局、どんどん走って先に行って。だから、それはある意味、ミトコンドリアの暴走に近いっていうね。で、結局もうわかると思うけど、ミトコンドリアの暴走した思考によって作られた組織というのは結局、最後は破滅に向かうっていうのは、もう目に見えてわかるっていうのは、今回、エネルギーの話でしているんだけど、その部分でもあからさまにわかるわけじゃない。

常にエネルギーを奪い続けて、奪い続けて、カラカラになるまで奪うわけでしょ。社員
のエネルギーをカラカラになるまで奪い続けて必要なくなったら、もうその人はさよなら
っていうね。で、また違うエネルギーを入れればいいだけでしょ、みたいな。また、新し

優秀な社員はどんどん入ってくるから、名前にブランドがあればね。そういう組織形態であれば、確かにね、短期的なシェアの視点でいけば、そういう発想で利益を上げればいいんでしょっていう部分にはなってくるんだから、本当に真逆に走っている、ゆうちゃん
の会社が、そうやって日本で一番の成果を出してもらえるっていうのは、やっぱりめちゃくちや嬉しいことだし、これがなんだろう。

猿田さんの星でも書かせてもらった、要は100匹目のサルじゃないけど、そういう組織ってというのがポンって、できるとどんどん派生していくわけだよね。世の中に。だから、ゆうちゃんみたいな会社って、やっぱりどんどん増えていくんじゃないかっていうふうには思うよね。

鈴木 はい、そうですね。

佐藤 うんうん、すごくそれはそう感じていることで。やっぱり、そういう社長っていうのは、そういう人間たちを集めるからね。類は友を呼ぶわけだから。で、ゆうちゃんの組織の、まあ、ゆうちゃんの会社とかにも遊びに行ったりもするけど、行くとやっぱり本当にメンバーがみんな元気だし、うん、元気すぎるっていうかね、本当、面白い会社だなあって思うんだけど、行くとね。

鈴木 確かにみんな若いですね。見た目もすごく。

佐藤 ああ、そうだね、確かに、確かにそれはあるよね。

鈴木 本当にありますね。

佐藤 自分たちと一緒に年を取っているのにね、

鈴木 そうなんですよね。

佐藤 みんな本当に若いね。確かに。これもやっぱり見た目もどんどんやつぱ若くなっていくんだなっていうのがね、そういうのはあるね。

鈴木 ありますね。

佐藤 やっぱりそういう組織って強いし、一枚岩だし、なんかね、みんなで助け合ってるっていうか、本当にみんな仲間なんだなっていうイメージがすごく湧くんだよね。ゆうちやんの事務所に行くと。

鈴木 あ、そうですか。

富とミトコンドリアの暴走

佐藤 そうそう。これがね、今世の中、どういう思考を持ってる人が多いかというと、例えば今ここはね、中東の方で今は撮影してるんだけど、中東にいて、すぐお金を持っている人の思考。もちろん全員じゃないよ。もちろん。全員じゃないんだけど、今、そういう、お金を持っている人たちの思考っていうのは、どこに向かっているかっていうと、結局、あれじゃない、プロローグでも書いたけど、結局SDの世界に憧れてって、あれは、

こう比喩的に書いたわけじゃないけど、リアルにそういうものに憧れて、そういう世界観を突き進んでいる人もいるから。

で、そういう人たちの今の思考ってどこに向かっているかって言ったら、地球が破滅するっていう方向に向かっているんだよね。要は自分たちの会社の収益を上げる。株価を上げる。自分の資本を増やすってことよね。自分の資本を増やそうとしている人たちっていうのは、要は自分の資本を増やすためには、地球を破壊していかなきゃいけないわけ。今のトップを走っている人たちはね。

地球を破壊しながら自分のお金を貯めて、そのお金を使って地球が破滅する前に脱出しようという思考になっちゃってるわけで、片や宇宙に脱出しようとする人もいるし、あとは、昔のロケットのサイロとかそういう深い穴にホテルとかシェルター施設だよね。で何

十日だけ暮らせるとか、何百日暮らせるっていう家を作っているとか。売ってたりとかね、すごいものよ。とにかく自分は生き抜くか、どう逃げ切るかっていう思考になっちゃってるわけ。

なおかつプラスで言うと、例えばシェルターがあつたとするとときに、そういう災害がバシバシ起きてきたときに、そこに軍がちゃんと自分を守ってくれるように集めるんだよね。集めてる契約をしている人もいるわけ。中にはね、これは例えじゃないか。実際のリアルな話なんだけど、全員じゃないっていうのは、もちろん言っておきたいけど、軍を集めているのも、そこに襲いに来る人たちがいるから。自分たちの食糧とかを。だからそれを排除するために軍を呼ぶっていう発想なわけです。

あの面白いのはね、さらにその人たちはどういう発想をするかって言ったら、その軍の人たちが自分を裏切らないためには、どうしたらいいかっていう発想になるわけ。ってな

るとあのなんだろうな中にある食べ物を保証してあげる代わりに、首に何かをつけさせてくれとか。自分の指紋と暗証番号でしか絶対に開かない食料庫を作るとかね。そういう発想になっていくな

鈴木 ええ、なるほど、

佐藤 現にね、いや、現になってるんだ、そうやってね。

鈴木 そうっというのは、もう、

佐藤 いや、あれなんだよ、ゆうちゃんもね、今聞いても、もう本当に笑っちゃうような話じゃない。なんだけど、彼らはリアルにそれを思っていて。もうつまりミトコンドリアの暴走でしかないわけで。そんなのはね、あのなんて言うんだろうな。そもそも、暴走し尽くしてしまった人間っていうのはなかなか無理だよ。デトックスは。かなり遠いつて言うんです。

鈴木 確かにそうですね。

佐藤 かなり遠くなるんだよね、だって、もう自分がどう生き残るかだけの話になっちゃってるわけでしょう。それは本当に生きてて寂しいなっていうかね、そんな感じがすごくするわけ。

鈴木　そうですね。

原動力の原点..大切な人の「死」

佐藤　そこでじゃあ、どういう生き方がいいんだっていうところになったときに、やっぱり、もちろんね、ゆうちゃんみたいな組織っていうのはすごい素晴らしいし、

鈴木　ありがとうございます。

佐藤　そういう組織がどんどん増えていくべきだと本当に思ってるんだけど、ゆうちゃん
が、そういうふうに行き着いたきっかけっていうのは、これはちょっと前に聞いた話にな
るから、あの音声を聞いてくれてる皆さんは聞いたことがない話なんだけど、ゆうちゃん
はその、昔大切な方をこう二人亡くされているじゃない

鈴木 ああ、はい。そうですね、

佐藤 それってお話ししてもいい話？

鈴木 大丈夫です。はい、もちろん。

佐藤 思い出すのも辛いかもしれないけど、話してもらえたらなと思うんだけど、

鈴木 二回、そうですね、はい。でまあ、ざっくりと三回ありまして、実は、

佐藤 三回か。

鈴木 そうなんですよ。

佐藤 そうだ三回だ。確かに。

鈴木 そうなんですよね。うん。父の死というのがまず一つ目で、

佐藤 それはゆうちゃんが何歳の頃？

鈴木 20歳ぐらいですかね。ずっとその、ほんとすごく強い父だったんですよ。ものすごく。見た目もすごいし、腕も太いし足も太いし、強いというのは、肉体的にも。あとは

その精神的にも。あとはなんというか。ざっくばらんに言うと、自分の舎弟というような人たちがたくさんいたみたい。ざっくり言うんですね。そういう様子をずっと見てたりして。すごく強い親分肌みたいな人で、強くて偉大な父なんだなっていうのを思ってたんですけども。

まあ、それがあの、病気になってか肝臓癌になって、発覚して三ヶ月くらいで、ころっと死んでしまったときに、自分の無力さを痛感しまして。

佐藤 気付くのが遅かったってこと？

鈴木 そうなんです。病院嫌いの人だったので、

佐藤 ああ、なるほどね。

鈴木 はい。でも気づいた頃には遅いって感じで。僕もちょっと冷静に判断できなくて、すぐく父のことを慕ってた。その父のお姉さんがいるんですけども、その父のお姉さんがどうしても、その本人に癌ということを伝えないでほしいと。癌と言われた自分の弟を悲しくて見てらんないってことで。すごいお願いされました。それでそっかって。僕もわからなくて。なんかその、冷静に考えられなくて、わかったよって言って、その言われた通りにしたんですね。

で、そのままあ実の親父は、まあ、自分は癌なんだろうけど、その治すしかないというような感じで。その癌と闘ってまして、三ヶ月。でもどんどん、痛くて、立ってもいられないとか、だんだん歩けないとか、そういう状態になってきて。でも最後に、電話で

「ゆういちの子供を見るまで死ねないな」って言われたときに、僕はその本人に、もう間もなく死ぬっていうことを隠している立場なんで、もういたたまれない気持ちになって、もうそれを涙をこらえながら、「じゃあ治してくれよ」っていうことを言っただけです。

で、それからもう間もなくして死んじゃったんですね。で、その時にすごく自分の無力さを痛感しまして。当時は、特にサラリーマンだったので。考えて、もっといろいろ本当はできたんじゃないかなというふうに思いましたね。実は名医だってきつというし、スーパードクターを探せば探せたかもしれないし、最先端の治療を施せたかもしれないけど、自分はそれができずに諦めて、ただ、何もできなかった無力さっていうのを痛感して。でもこうやるせない気持ちで悶々と過ごしていた最中にまたあれなんですよ。

次の事件というか、同じようなことが起こりまして、そのサーフィンが好きで、海外旅行に行ったことがあったんですけども、そこですごく仲のいい友達ができたんですね。現地の人のインドネシアの友達のワユっていう名前だったんですけども、すごく気のいいワユで、彼には以前、日本人の彼女がいたので、片言で日本語を話せたんですよ。

佐藤 おお、なるほどね、

鈴木 はい。で、すごい仲良くやらせてもらって。僕は日本に帰国して、サーフィンが好きなんで、友人とインドネシアのバリ島に行って仲良くなって帰ってきて、またバリ島行きたいなあなんて思ってたところに、サラリーマンで仕事してたら、その日中ですね、あのなんかよくわからない、非通知で電話が鳴りまして出たらブーってなるんですよ。これ

公衆電話だなんてすぐわかりまして、出たらガラガラの声で「ユウイチ」って、誰？って聞いたら「ワユ、ワユ」って。最初詐欺かなと思ったんですよね。その何か、

佐藤 声も違ったの？

鈴木 声も全然違って。でも、話し方とかイントネーションが、これは本人だとなって、声は全く違うけど、話を聞いてたら「ワユ、タイヘンナビヨウキ、オカネアレバ、チリヨウデキルカモシレナイ、オカネアルカ？」って、僕は本当になかったので、今ないよって言って、ただどうにかすればできたかもしれないけども、そのそんなに急だとは思わなくて、もうちょっとで給料日だから、今はないけど、あとになったらあるぞって、「ワカツタ、ソツカ」って言ってたら、途中でガチャンと切れちゃったんですよ。多分、公衆電話のお金が切れちゃって。

でもそれ以降、その電話が鳴らなくて、それから一週間後ぐらいに共通の知人につながり、そのワユが死んじやったっていうのを聞いて。

佐藤 うーん、早いね、

鈴木 そうなんですよ。だから多分、最後のなけなしのお金で、いろんなところに電話かけて、借りようとしていたんですよ。で、またそれでもですね、同じようにまた、自分の無力さを痛感しまして。

佐藤 もし、そこで送ってあげられてたらと、

鈴木 そうなんですよ、これまた助かったんじゃないかと。俺は一体何をしてるんだって
いう。助けたい人を助けられないんだなってことで、やっぱり自分の無力さを痛感しまし
てん

佐藤 うん、なるほどね、

成功者を訪ね歩いた日々

鈴木 はい。でなんとかしないといけないってことで、だんだん僕の中で、もっとお金を
稼ぐためについていうことを考え始めたんですよね。で、いろいろ調べ始めたり。そういう
なんというかな、成功してる方の本って、昔からいっぱい出てるじゃないですか

佐藤 あるよね、本屋に行けば。

鈴木 そうです。そう、いっぱいあったんで成功してそうな人を片っ端から読みましたし、あの著者に手紙を送りつけまして、

佐藤 ああ、そうなの。

鈴木 そうなんです。何人かにちゃんと会って話もして。

佐藤 あっ、会ったの？

鈴木 結構会いました。

佐藤 あっ、その行動力はすごいね。

鈴木 意外と会えるじゃないですか。意外と。

佐藤 うん、送ってくる人はあんまりいないからね。

鈴木 そうなんですよね。また変な熱い手紙なので、謎だから会ってみようかってことで、何人かは会ってくださって、優しい人たちが多くて。

佐藤 実際に本当は優しい人が多いからね。世の中にはね。

鈴木 多いですね。でもなんか、いまいちこうしっくりこなかったんですよ。で、いろいろ調べていて、その失礼な話、佐藤さんもその中の一人というか（笑）

佐藤 いい、とってもいいね（笑）その中の一人に紛れさせていただいたと思うと、ありがたい（笑）

鈴木 いや、そしたら佐藤さんとお会いした時に衝撃が走りまして、その他の成功者たちと明らかに、なんというか、僕は何もわからないんですけども、雰囲気違って。何よりも行った時にその周りにいる人たちの雰囲気違ったんですよ。ご本人はもちろんのこと、

要は周りの社員さん、その会社に行った時の社員さんがすごく楽しそうとか、ニコニコしてるとか、所謂ノンストレスというか。

佐藤 ああ、まあ、遊びに来てるみたいな感じだからね。

鈴木 それに衝撃を受けまして、

佐藤 うーん、あつ、そうなんだ

鈴木 そうなんです。でもお金を稼ぐってやっぱり大変なことだと思ってましたので。すごい努力で、すごい頑張りで。

佐藤 確かにかなり当時は本当に少人数とかでやっていたし、もうある意味みんな家族みたいな感じで、楽しくワイワイやってた時だから、なおさらだったかもしれない。

鈴木 それでまた、セミナーに出させていただいて、その懇親会に呼んでいただいたときに、その社員さんに話したときに、あまりにも優秀なので、その社員さんが。あの、ちょっと興味本位で失礼なんですけども、聞いてみたら、「あの他の会社とかって、お考えになったことないんですか？」って聞いたら、「いや、考えるわけないじゃん」って。「うちこの会社も社長も大好きだから」っていうのを言われたときに、ズバーンと衝撃が走りまして。

佐藤 ありがたい。

鈴木 ああ、なるほどって思って、なんというか、僕の方から一生懸懸命こう、お近くに
いたくなってことで、

佐藤 すぐにあの北海道行きますみたいな。

鈴木 そうなんですよね、鞆持ちさせてくださいって。

佐藤 テーブルの横に椅子を置かせてくれとか。そういった変なことと言ってたよね。

鈴木 何か秘密があるんだろうなと思って知りたかったんですよね。

佐藤 やっぱゆうちゃんはほんとにね、なんかこう人に好かれるのがすごく、それはもう特権であり、

鈴木 ありがとうございます。

佐藤 うん、いや、見た目はちよつとね、なんか強面なのにさ（笑）

鈴木 ありがとうございます（笑）

佐藤 当時も髭生えていたよね？

鈴木 生えてましたね。

佐藤 うん。でもやっぱりなんか人に好かれるね。

鈴木 ありがとうございます。で、佐藤さんにお会いしたばかりの頃も、あれでしたよね、まだこう、まだまだ分かってないという。とにかく頑張らなきゃ、努力しなきゃ努力しなきゃってことで。もう寝る間も惜しんどはまさに本当にその通りで、でも側でなんで佐藤さんはこんなにニコニコしながら仕事してるのに、こんなにうまくいってるのかなと疑問に思いながらですね。

僕はその離れたらしめっ面で、こう努力してました。その頃にはですね、その僕と一緒に会社を立ち上げたメンバーがもう一人中野っていう人間がいて。その後、同じく上京

してきてくれた川崎っていう人間がいて、その川崎が亡くなっちゃったんですよ。その頃からですかね、いろいろと自分の中で、こう大きく変化がありましたね。この頑張るって一体何なのかなとか、何のために仕事やってるのかなと。

佐藤 確かにあのね、川崎の出来事は、やっぱり大きい出来事だったよね。ゆうちゃんにとってはね。でも本当に自分にとってもやっぱり本当に大きい出来事だったから。いろいろ考えさせられたなあと思う。

だから、まあやっぱり、その話を聞いて、どこにゆうちゃんの原動力と行動力とか、どこら辺にあるかっていうのがまさしく、本当にその周りの大切な人の死を体験しながら、その人たちを守りきれなかった自分っていう部分だと思うんだよね。結局、ゆうちゃんの根幹にあるのは。

鈴木 うん、はい。

佐藤 それって本当になんて言うんだろう。やっぱり人のため。人のためってすごく難しい言葉で、あの自分を犠牲にしてまで、なんとかかかっていう話じゃないんだよね。言いたいのは。自分は不幸になってもいいから、あの人はどうこうしていつていう話でもないのね、言いたいのは。これって、あの音声でパツと伝えてしまうと、すごい勘違いを生んでしまうから、あまり容易に使いたくない言葉なんだけど、あのなんて言うんだろうな。でも、そういう言葉なんだよね。なんて言えばいいのかは難しいんだけど、その命を懸けてまでやり遂げたいとか、命を懸けてまでこれをしたっていう思いなんだね。思いの方なんだよ。

それって自分が不幸になっていいとか、そういう話じゃないんだよね。だから、こうちよつと本当に音声で、そこだけはちよつと間違わないようにしてほしいんだけど、ゆうちゃんにはやっぱりその助けられなかった人たちがいる。大切な人たちがいた。で、やっぱりそういう人たちを助けられなかった。自分は自分、自分の力不足だった。だから、そういう人たちをなんとかしたいっていう。その思いである。この誰かのため、誰が為にっていう言葉なんだけど、命を懸けてまでこれをやり遂げたいっていう。

その思いっていうのは、結局、命を懸ける。命っていうのは、ミトンドリアに通ずるものがあるから、やっぱりそのミトンドリアっていうものが外れるわけだよね。ポロッと外れる。外れて、もう「わたし」のエネルギーがダイレクトに本当に入ってくる。上の天の「わたし」のね。ひらがなの「わたし」のエネルギーがダイレクトに入ってくるし、やっぱりご先祖様だって。やっぱりそこら辺で守ってくれているとは思うんだよね。

いや、もちろん、ゆうちゃんの場合は、お父様も守ってくれているわけだよね。そこは絶対にどう考えたって。で、これは、別の個人で取った音声の方でも話してる内容なんだけど、あのこれね、ほら、自分は二回失敗しているんだけどね。一回はその24歳の頃にカフェをやって失敗した時なんだけど、やっぱりその時は本当に命を絶ちたいって思うくらい辛かったんだよね。もう八方塞がりで、もう何も見えないし、だって売り上げは立たないし、来月も赤字なのは分かってるし、じゃあ、そのお金どうするの？みたいな、どうやってお金を補填すればいいの？とか、もうわけわからなかったんだよね。

で、子どもが二人いて路頭に迷わすかもしれないっていう。その中で命を絶った方が楽なんじゃないかって思うくらい辛かった。八方塞がりだからね。その時に家に帰って子供がこう寝ている姿を見て、本当に笑顔で二人がね。あのまだちっちゃかったけどね。いたんだけど、本当に笑顔で寝てて。自分は何不自由なく親に育てられた大人にまでさせても

らって、なのにこの子たちにね。もう借金生活をさせているわけでしょう。させている自分がなんでここで諦めようとしてんの？っていうふうに、本当に自分に腹が立って。

だから、この子たちをめっちゃめっちゃ豊かにしてあげるのに命をかけたってよね。豊かにしようというふうに命をかけて。その時は本当に、そこから一気にもうネットの世界と出会ってっていう感じで。会社もどんどん増えていったって。もう結局、命をかけてまで、この子たちを豊かにしたいっていう決意をしたっていう覚悟を決めたんだよね。やっぱり外れるよね。自分の欲っていうのは全くなくなるんだよね。稼いでいい車に乗るなんて、全く考えないじゃん。そういう時に。とにかくこの子たちを豊かにするために覚悟を決めるっていうね。命をかけて、覚悟を決めるっていう、その思いだよね。

やっぱりそういう部分だと思うんだよね。結局、ゆうちゃんはそこがすごい強いから。だから、その守れなかった自分で、今は日本一になって、すごい優秀な社員にも恵まれて、今新たに一緒になって。二人でまたこう地球上に革命を起こしていくっていう、やっぱり未来の子供たちが、こう本当に希望を持てる世界にしたいんだよね。

鈴木　そうですね。

佐藤　したよねっていうふうに言ったり、ずっと喋ってるし。で、そこにやっぱり二人は命をかけているわけで、命をかけてやり遂げようとしてるからね。そこに対しては。だから、やっぱりすごいあり得ない奇跡っていうものがたくさん起きるわけじゃない。やっぱり、そういう思いだよね。覚悟っていうか、やっぱりそこがあると、人って、すごくそのな

んていうんだろうな。上の「わたし」の光のパワーっていうかね、そこが得られるなあっていうふうに思うんだよね。

生かされていることへの気づき

佐藤 その時にやっぱり気づくのが、なんて言うんだろうな。やっぱりその我が強くなっちゃって我欲に走っている時ですら、ずっと見守られてたんだなっていうのは、なんかわかる？

鈴木 うんうん。

佐藤 これはもうほんと、上からしてみると、本当に自分のことをバカ息子と思ってると
思うんだよね。もう、早く気づけよと。それでもね、こう見捨てずに、ずっと守ってくれ
てたんだなっというか。そういう思いはすごくあったなっと思うんですね。だってね、や
っぱり心臓はね、自分が何もしなくても動いてくれているわけで、

鈴木 そうですね。

佐藤 血液は何もしなくても何もしなくても巡ってくれているわけですから。やっぱり本
当に生かされている。愛されて生かされているんだなっというのは、本当に気づくってい
うかね。それも気づけないっというかね。我欲に走った時は気づけないんだけど、もちろ
ん。やっぱりそこらへんがね、全部外れると本当にそこらへんのありがたさに気づけるな
っというのと思うよね。

鈴木 いや、本当ですね。

1%のきっかけ

佐藤 そこは本当に思うなあと思って。なので、まあちょっとそうだね、そんな感じかな。だから結構いろんな話に飛んだりはしてるけど。方向性は一つの話をしたんで、多分何回か聞いていただけるのであれば、すごくいろいろ見えてくるものがあるかなというか、ヒントもね、何か一つのきっかけっていうのはあるかなっていうふうには思うかな。

もちろんこの音声もね、あの、全てを変えるために撮ろうなんて、そんなおこがましいことは全く思ってたなくて。TheGreatLuckもそうだし、音声もそうだし、この音声もね。たまたま聞いていただけただけで、何か本当に1%のきっかけって思ってるから。1%のきっかけをつかんでももらえれば、本当に99%の運命というものは、自分で変えられるっ

ていうね。そういうふうに乗ってるし、この本もそうだよ。1%のきっかけなんだよね。本当に。つかんでもらって、99%は自分で本当に変えられるから、変えてもらえたらすごい嬉しいなというふうに乗るよね。

鈴木 はい、そうですね。

佐藤 なのでちょっと対談と言っておきながら、またいろいろと、喋っちゃったんだけど、ゆうちゃん、ここで何かあるかな？

鈴木 ないです。

佐藤 はい、今回ね、何もテーマを決めずに走ってしまったけれども、ある程度内容の方もね。ちよつと自分も聞けてなかった話もちよつとあったし、なんかね、お互いにも、ちよつと勉強になった部分もすごくあったんで、面白い対談だったなというふうには思います。

鈴木 はい、ありがとうございます。

佐藤 また何かね、機会があったらちよつと対談をお願いしちゃうかもしれないけど、

鈴木 もちろん喜んで、ありがとうございます。

佐藤 今回、あのメールかラインか何かで、この音声をお届けするはずなので、はい。もしかしたら、ゆうちゃんのこういう話も聞きたいみたいなのがあるかもしれないし。

鈴木 いやいやいや、

佐藤 何かあるかもしれないし、あったらね、もし時間をまた取れたらこうやって音声を追加でね、アップしてもいいと思います。

鈴木 はい、嬉しいです。

佐藤 嬉しいなと思うんで。なので、ちょっとね、あのどれくらい撮ったんだろう。結構な時間にはなったかなと思うんですけども、あのゆうちゃんとはね、普段からこういう会話をずっとしたりとかして、旅とかもね、前とかはインドのお寺を回る旅の時なんかはね、お寺からお寺まで車で6時間とかだったよね。

鈴木 確かにそうですね。

佐藤 その中で、三日四日かけてお寺をめぐったりとかもしてね、その中でもこういう話をずっとね、車の中でして、旅をしたりもしてるんですけども、やはりそう、こういうね、お互いのね、夢と一緒に共有できる仲間っていうのはね、自分にとって本当に宝だと思いますし、このTheGreatLuckを読んで、自分のデトックスがどんどん進み、あの天のひらがなの「わたし」とつながっていくと、本当にそういう類は友を呼ぶじゃないですけど、そ

ういうね、本当に自分が求めている仲間っていうのは、仲間をこうなんとか集めたいって思うと、それは欲に変わっちゃうから。そうではなく、自然の流れで川の流れに逆らわず流れていくと、必要なタイミングで必要な方と本当に出会えるようになるので、今後の楽しみにしてもらえたらなと思います。

で、ゆうちゃんもそうだし、それはね、私もそうなんですけども、あの未来の一コマを描いても、やっぱり宇宙の台本っていうものは、自分の想像では絶対にできない。これは本当に覚えておいてもらいたいなところで、ゆうちゃんもそうだよな。やっぱり、想像だになかった出来事ってたくさん起きるよね。想定外が。

鈴木 はい、起きますね。

佐藤 嘘でしょっていうことはね、いまだに起きるもんね。

鈴木 うんうん。

佐藤 びっくりしちゃうよね。

鈴木 そうですね。

佐藤 本当にそんなのね、本当にゆうちゃんも起きるし、私も全然起きてるんで、あのな
んていうのか、起きてても結局やっぱりそれは宇宙が作った完璧な台本だっていうふうに信

じ込めているのであれば、楽しめちゃうわけなんですよね。ゆうちゃんもやっぱ楽しめちゃうよね。

鈴木 はい、めっちゃくちゃ楽しいですね。

佐藤 めっちゃくちゃ楽しいよね。はたから見たら。いや、それ、大変じゃない？みたいなこともあるよね。

鈴木 そうですね、きついと思います。

佐藤 二人とも笑って、それをクリアしていくっていうか、本当に宇宙は完璧な台本を作るなって毎回思ってるんで。必ずあなたが描いた一コマっていうものには、たどり着く台本になっているので、その宇宙の台本を信じて、楽しくね、人生を満喫してもらえたらなと思います。ということで、じゃあ以上でいいかな。以上でゆうちゃんとの対談音声を終りたいと思います。ありがとうございました。

鈴木 ありがとうございます。